

デザインと創造の業界動向調査 2026

AI 動向

リーダー層が AI を実験段階から
実用へと移行させている方法と
その生産性を超えるインパクトとは

 AUTODESK

『デザインと創造の 業界動向調査：AI 動向』に ついて

この2026年版『デザインと創造の業界動向調査：AI 動向』レポートは、2026年1月から2月にかけて Statista Plus Research と共同で実施した「AI 動向調査 (AI Pulse)」をもとに作成されています。本調査には、世界中の建築・エンジニアリング・建設・運用 (AECO)、設計・製造 (D&M)、メディア&エンターテインメント (M&E) 業界のリーダー 2,500 名からの回答が含まれています。

重要な用語：

アーリー アダプターとは、所属する組織（企業を含む）が AI を効果的に導入しており、既にエージェント型 AI や大規模言語モデル (LLM) などの高度な AI システムを業務フローに組み込んでいると述べた回答者を指します。このグループは、2026 年度版への回答者全体の 19% (n=469) を占めています。

デジタル成熟度の高い組織とは、DXの取り組みが「目標の達成に近い」または「目標を達成している」と評価した組織を指します。取り組みを「初期段階」または「取り組みの最中」と評価した組織は、デジタル成熟度が低いと見なされます。デジタル成熟度の高い組織は、2026 年度の回答者 (= 1,057) の 42% を占めます。

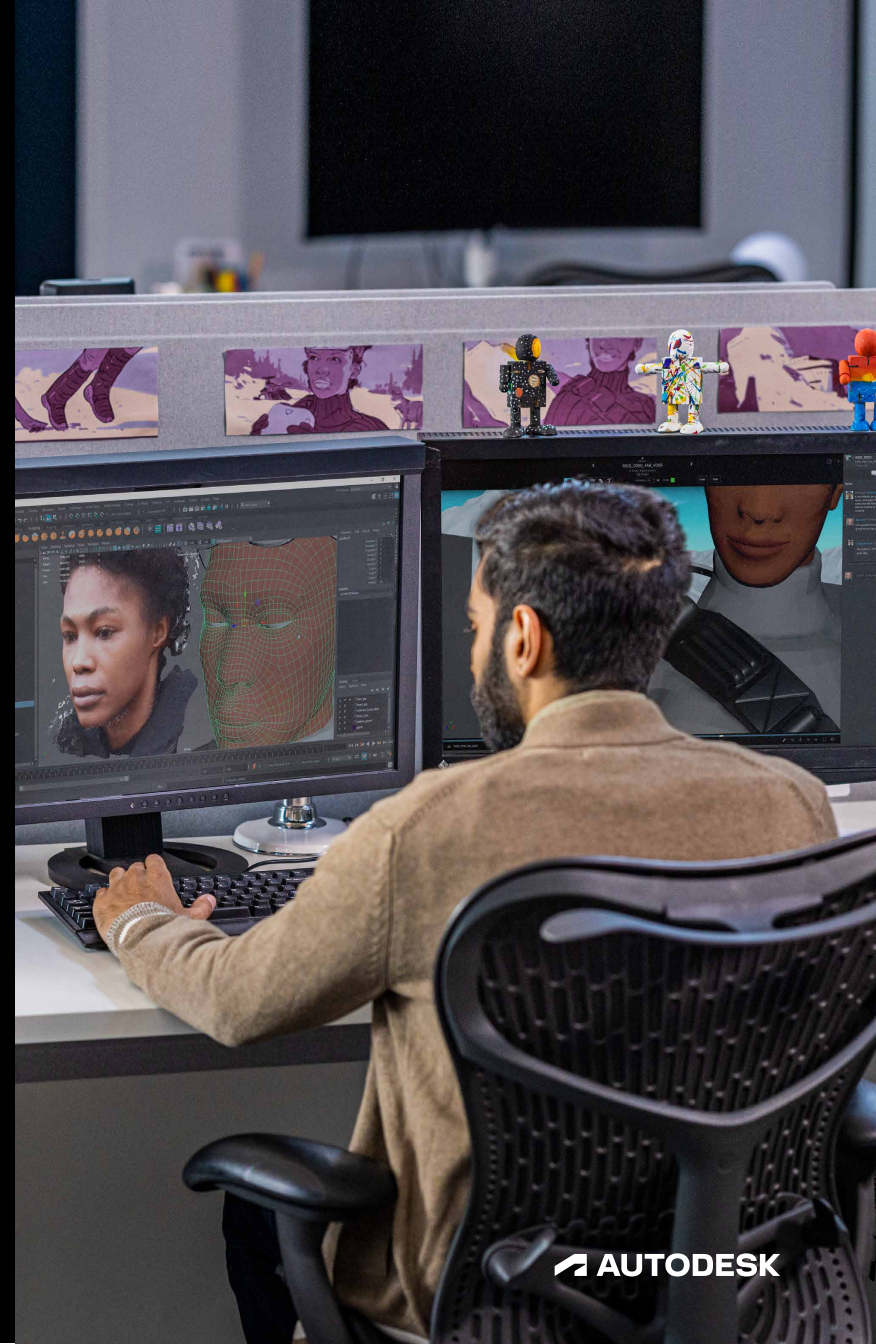
デザインと創造 (Design and Make) の 業界とは？

この世界を形作る、業界を超えた技術と働き方のコンバージェンス（融合）により、「デザインと創造」という独自のカテゴリーが生み出されました。「デザインと創造」は、スケッチを学校建築へ変容させ、コンセプトを自動車へ変え、神話を映画へ昇華するなど、複雑なアイデアを力強い体験へと変換して我々を取り巻く世界を作り上げています。世界経済フォーラムによると、このデザインと創造の業界へ従事している人は、少なく見積もっても 2 億 9,570 万人に達しています。

この業界で働く人にとって、「デザインと創造」は単なるプロセスに留まらず、仕事を成し遂げる方法における、進化し続ける考え方そのものです。デジタル ツールと相互接続されたデータ、新たなコラボレーション手法の普及によって、そのプロセスは直線的なものから反復的なものとなり、時間の経過を伴う幅広い情報に基づいた意思決定が行われるようになりました。実務を行う者は、スピードと持続可能性、リスクのバランスを取ることで、分野を超えた複雑さを巧みに乗り切ろうとしています。「デザインと創造」は、急速に変化する世界の課題を解決するための、より統合的で適応性の高いアプローチへの転換を反映するものです。



序論



序論

デザインと創造の業界で、日々のワークフローに AI が浸透しています。組織にとっての課題は、もはや「AI を導入すべきか」ではなく、「有意義な価値を AI でどう生み出せるか」になりました。その導入が加速する中、競争優位性は技術そのもののへのアクセスから、システムやプロセス、チーム全体を効果的に活用する能力へと移行し始めています。

同時に、能力の新たなレイヤーも出現しています。AI は、入力に応答するツールという枠を超え、より業務の遂行プロセスへ能動的に関与できるシステムへと進化しています。タスクを調整し、業務を推進し、ワークフロー全体で機能する「エージェント型 AI」という概念が具体化し始めているのです。

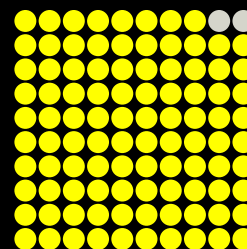
こうした機能が指し示すのは、AI が業務の組織化における能動的なレイヤーとなり、データを結びつけ、プロセスを自動化して、よりダイナミックな意思決定を可能にする未来です。しかし、その未来を実現する基盤は、まだ多くの組織で構築途中です。

空間デザイン会社である株式会社船場で BIM マネージャーを務める大倉 佑介氏は、技術革新の時代におけるリーダーシップの課題について、「技術の進歩は人間の理解をはるかに上回るスピードで進んでおり、企業がその変化のペースに人材、プロセス、スキルを合わせ続けることは困難です」と述べています。

マイクロモジュラー PWR 発電所の開発企業 Last Energy のチーフ オブ スタッフ、Olivia Columbus 氏もこの見解に同意し、「AI は、私たちがテクノロジーと関わる方法を抜本的に変化させます」と語っています。「私たちは同様のことをインターネットや検索で経験しましたが、あらゆるものの仕組みが変わっていくでしょう」。

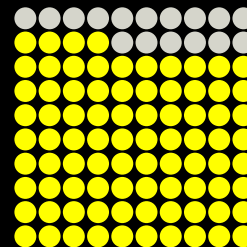
目の前に広がる機会は極めて大きなものですが、最終的な成功を収めるのは AI を最も早く導入した組織ではなく、戦略的な優先度に沿って AI とデータ、人材を統合し、最も効果的に活用する組織になるでしょう。

『デザインと創造の業界動向調査 2026 : AI 動向』の重要な知見



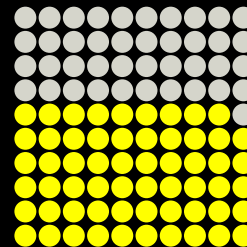
AI ツールは至る所で活用されています。

「デザインと創造」の業界では、リーダー層の 98% が、少なくとも 1 つの AI ツールを利用しています。



AI が最も大きな影響を与えているのは生産性です。

リーダー層の 84% が、自社の生産性が AI によって向上したと述べています。



エージェント型 AI の利用が急速に拡大しています。

59% の組織が、エージェント型 AI を既に利用しているか、1 年以内に導入する予定です。

AI のアーリー アダプターは、そのメリットをあらゆる面で実感しています。AI の導入を積極的に進めている組織では、他を圧倒するほど大きな成果が表れています。意思決定、成果物の質、イノベーション、コストのすべてにおいて、他の組織と比較して 2 桁の改善が見られています。

デザインと創造の 業界において

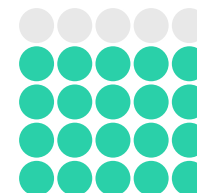
AIは必須条件 となっています



98%
のリーダー層が
AI ツールを活用



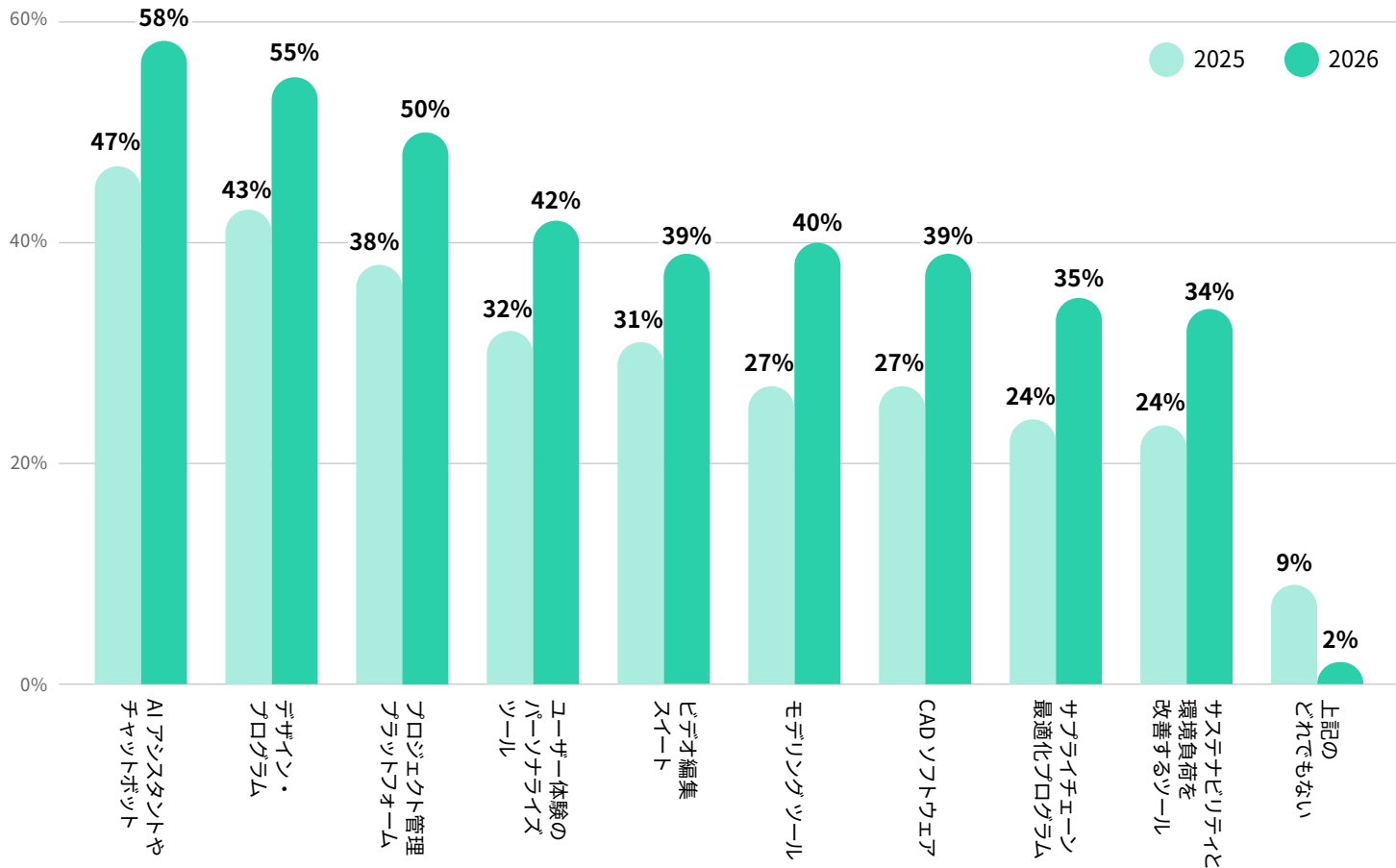
78%
のリーダー層が
DXの加速を
必要だと考えている



81%
の組織がAI投資を
拡大する予定

リーダー層の 98% が少なくとも 1 つの AI ツールを利用

大半のツールが前年比 10% 以上の利用増加



調査の質問: 「現在ご自身が使用しているツールの中で、AI が組み込まれているものはありますか?」該当するものすべてを選択してください; パーセントを選択。

注: 読みやすさを考慮し、回答選択肢の一部を省略しています。「その他」および「わからない」は表示されていません。

「AI は“オプションエンジニアリング”に非常に優れており、コストや CO2 排出量などの要素に応じて複数の選択肢を生成させることができます。これは、プロセスの初期段階におけるチームのトレードオフ評価方法を変えるものです」

BRAD SARA 氏
Warren & Mahoney (建築・設計ファーム)
Digital Practice Lead

日常業務への統合の向上に伴い、デザインと製造の業界全体で AI 導入が急速に進められています。成果向上を目的として組織が従業員に AI 活用を推奨しており、ChatGPT や Copilot、Claude などのツールは、今やあらゆるオフィスで利用されています。リーダー層ではほぼ全員 (98%) が、少なくとも 1 つの AI ツールを利用していると回答しており、その大半のツールで、利用率が前年比で 2 桁の伸びを示しています。

78%

のリーダー層が、
自社の競争力を高めるためには
デジタル化の加速が必要だと述べている

わずか2%

のデザインと創造の業界のリーダー層だけが AI ツールを使っていない

AI 導入競争において著しい進展を見せているのが中小企業（従業員 1-49 名）であり、少なくとも 1 つの AI ツールを導入しているリーダー層の割合は 11 ポイント増加。その一方、中堅企業は 4 ポイント、大企業では 3 ポイントの増加に留まりました。

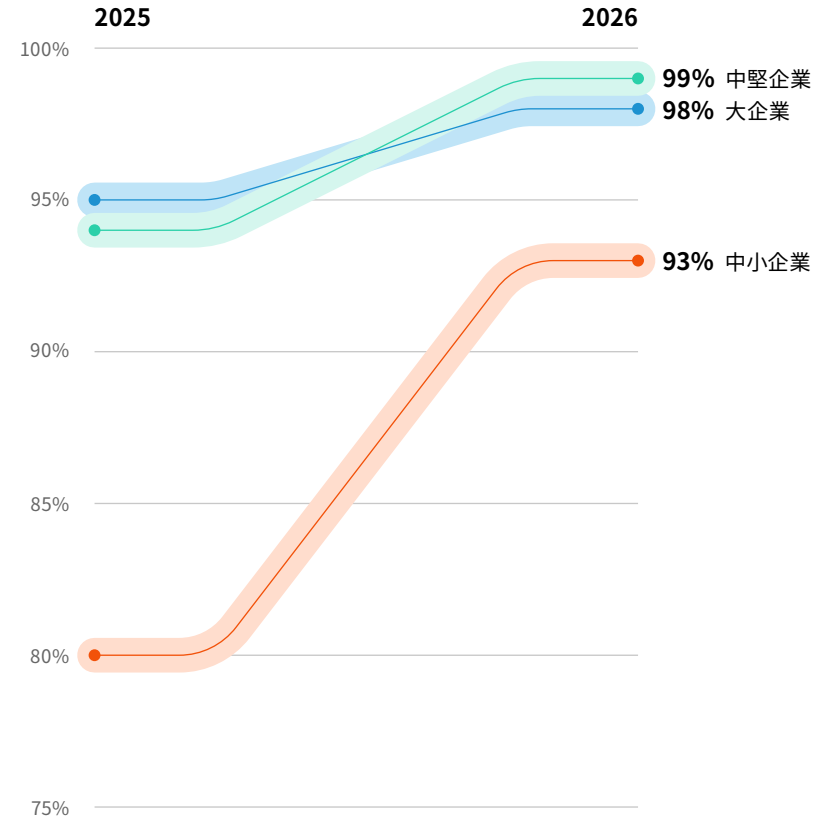
導入のスピード以上に注目すべきなのが、その導入の性質がいかに急速に進化し、期待がどのように変化しているかという点です。AI はわずか数年で実験段階から基本へと移行し、デザインと創造の業界の企業にとって、AI はもはや差別化要因ではなくなりました。AI が普及した時代に競争力を維持するには、ツールの数よりも、それをどう大規模に実装するかが重要です。

「ライセンスのような規制の厳しいプロセスを効率化できる AI ツールを開発する企業が、既に出てきています。これは複雑な業界において、処理期間を大幅に短縮する可能性を秘めています」

OLIVIA COLUMBUS 氏
Last Energy 社 チーフ オブ スタッフ

Warren & Mahoney のデジタル・プラクティス・リードを務める Brad Sara 氏も、この見解に同意しています。「AI は既に新たな期待になりつつあります。波の先頭に乗っていれば優位性を得られますが、あっという間に誰もが追いつき、業務を行う方法の一部に過ぎないものになります」。

中小企業における AI の導入が加速



調査における質問項目：「現在、ご自身が使用しているツールの中で、AI が組み込まれているものはありますか？ 該当するものすべてを選択してください」；AI ツールを少なくとも 1 つ使用している回答者の割合。

デザインと創造の業界のリーダー層は AI に対してさらに強気な姿勢を見せる

1/3 の組織で投資額が大幅に増加



調査における質問項目：「御組織における 2025 年度の AI 投資は、2024 年度と比べてどのように変化しましたか?」「わからない/該当なし」の選択肢は非表示。

各組織は、成功を収めている AI ソリューションの拡大に注力して、多額の投資を既に行っています。リーダー層の 81% が、自組織が過去 1 年間に AI への投資を増やしたと回答しており、そのうち 40% が「大幅に」または「かなり」投資を増やしたと述べています。

当然のことながら、デジタル化が進んだ組織では投資が特に活発で、54% が「大幅に」または「かなり」投資を増やしているのに対して、デジタル化が進んでいない組織での割合は 30% にとどまっています。中小企業ではツールの利用が急増しているものの、その熱意に見合うだけの投資は行われていません。投資を「大幅に」

または「かなり」増やすと回答した中小企業はわずか 22% に留まるのに対して、大企業では 51% に達しています。AI が競争の土俵を平準化する中で、AI 投資の追加コストを早い段階で負担した企業は、長期的には競争優位性において報われる可能性があります。

AIの導入が進むことで そのメリットも増大



84%

の組織が
AIの導入による
生産性の向上を実感



77%

のリーダー層が、AIが
イノベーションを促進すると回答

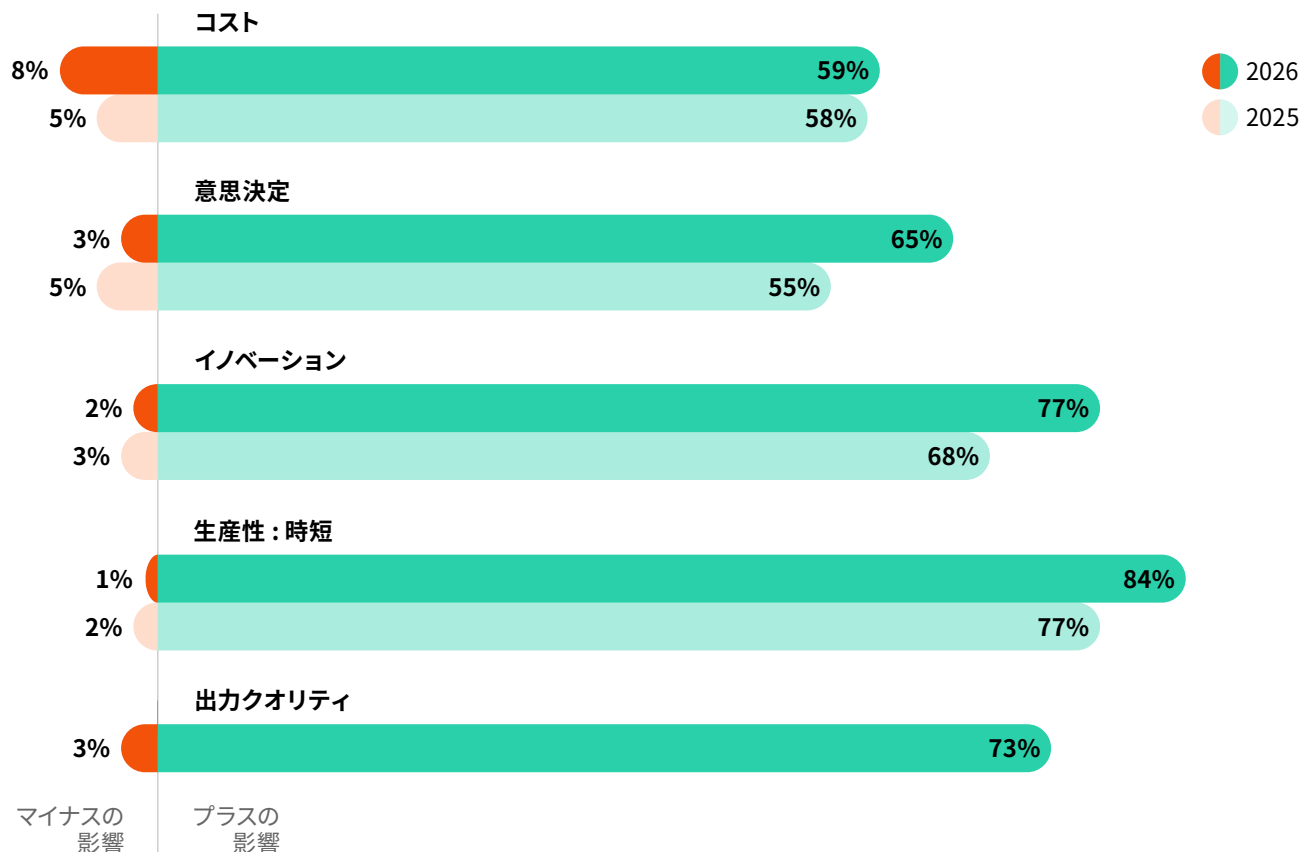


48%

の組織が
大規模言語モデルを
今後1年以内に導入予定

AI はデザインと創造の業界全体にプラスの効果

リーダー層の 84%が、AI が生産性にプラスの効果をもたらしたと回答



84%
のデザインと創造の業界の組織が
AI が生産性を向上させると回答

デザインと創造の業界の組織において、AI は今のところ、その期待に応えています。リーダー層は、AI が日常のワークフローにより組み込まれることで、2025 年度と比較して今年は全般的に AI より良い成果が得られたと述べており、5 社中 4 社が AI によって生産性が向上したと回答しています。

エンジニアリング・アドバイザー・コンサルティング企業 Beca の最高変革・イノベーション責任者である Thomas Hyde 氏は「以前は数週間かかった作業を、AI なら 10 分から 15 分で完了できています」と述べています。「これは、生産性に対する期待や、チームが価値を提供できるスピードを根本的に変えるものです」。

組織はプラスの影響をあらゆる分野で実感していますが、変化が見られない唯一のカテゴリーとして際立っているのがコストです。この停滞は、将来的により大きな成果を得るために現在組織が時間と資金を投じており、AI 投資が増加していることを反映している可能性が高いと思われます。

調査における質問項目：「御社における AI の導入は、以下の項目にどのような影響を与えましたか？」回答選択肢：「悪影響」、「影響なし」、「好影響」。
好影響の場合、追加質問：「AI は以下の項目に、どの程度の影響を与えたとお考えですか？」回答尺度：「わずかに (25% 未満)」、「中程度 (25% 以上 50% 未満)」、「かなり (50% 以上 75% 未満)」、「著しく (75% 以上 100% 未満)」、「劇的に (100% 以上)」

AIに関する議論の多くは生産性の向上に焦点が当てられがちですが、有意義な変化は組織のあらゆるレベルで起きています。AIは単に同じ仕事をより速くこなすだけでなく、仕事の進め方そのものを根本から変革し、意思決定が下流の環境に与える影響を可視化する手助けとなります。この変化は微妙ながら極めて重要なものであり、AIを単なるタスクの向上からプロセスそのものの再構築能力へと変貌させます。

デザインと創造の業界の組織において、過去1年間で意思決定分野は10ポイント上昇し、最も大きなプラスの影響が見られました。現在、より良い意思決定を行うためにリーダー層の65%がAIを活用していると回答しています。これらのリーダーのうち、20%はAIが意思決定に「非常に大

きな(75%以上100%未満)」プラスの影響を与えたと述べています。またリーダー層のうち、成果物の品質が大幅に改善したと認識しているのは24%、イノベーションに大きな影響があったと述べているのは27%です。

建設・エンジニアリング企業である John Sisk & Son 社でデジタル プロジェクト デリバリーを担当する Cillian Kelly 氏は「AIには、特に複数チームの連携が必要となる複雑な環境において、プロジェクト間の調整を改善する大きな可能性があります」と述べています。「それは、より良い成果を生み出す真の可能性を秘めています。」



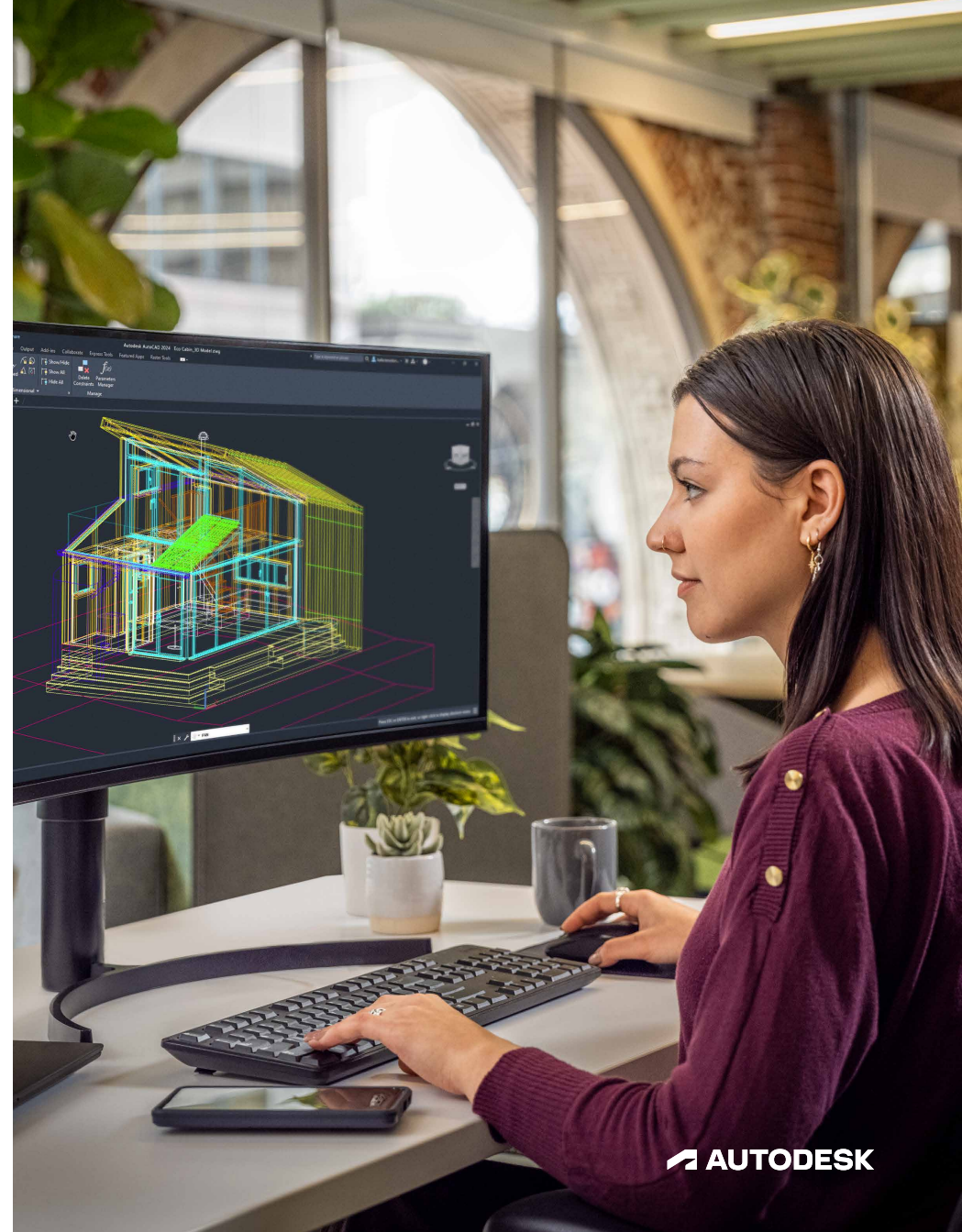
77%

のリーダー層が、AIはイノベーションを促進すると回答



73%

のリーダー層が、AIによって成果の質が向上すると回答



Nexus Power 社が AI の活用による知見で製造プロセスを最適化

Nexus Power は、従来のリチウム系システムに代わる農業廃棄物を原料とした生分解性バッテリーの採用により、新たなバッテリー製造方法を生み出しています。

同社のチームは従来の試行錯誤に頼るのではなくデジタル シミュレーションと高度なモデリングを活用して、物理的な生産を開始する前にバッテリー設計の検証、改良、最適化を行っています。このアプローチにより、エンジニアはより幅広い設計の可能性を模索し、性能向上の余地を早期に特定できるほか、コストのかかる物理的なプロトタイプ作成を削減できます。

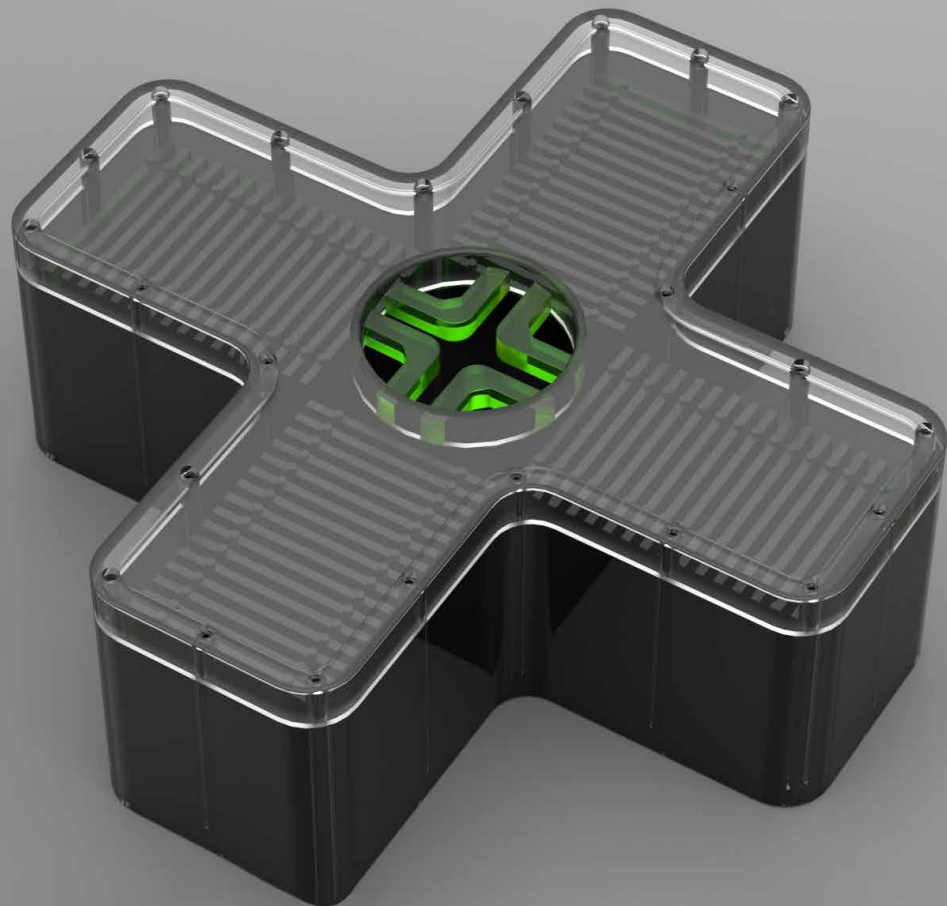
AI を活用したワークフローは、精度の向上と手戻りの削減により開発の効率化にも寄与しています。デジタル環境で設計を検証することで、Nexus Power はコンセプトから量産可能なソリューションへより迅速に移行し、材料の無駄を最小限に抑えることができます。

同社のバッテリーは、エネルギー密度が高いことから、同サイズの他社製品と比較して最大 25% 高い性能を発揮し、豊富で低コストな原材料を活用することで、製造コストの削減も実現しています。

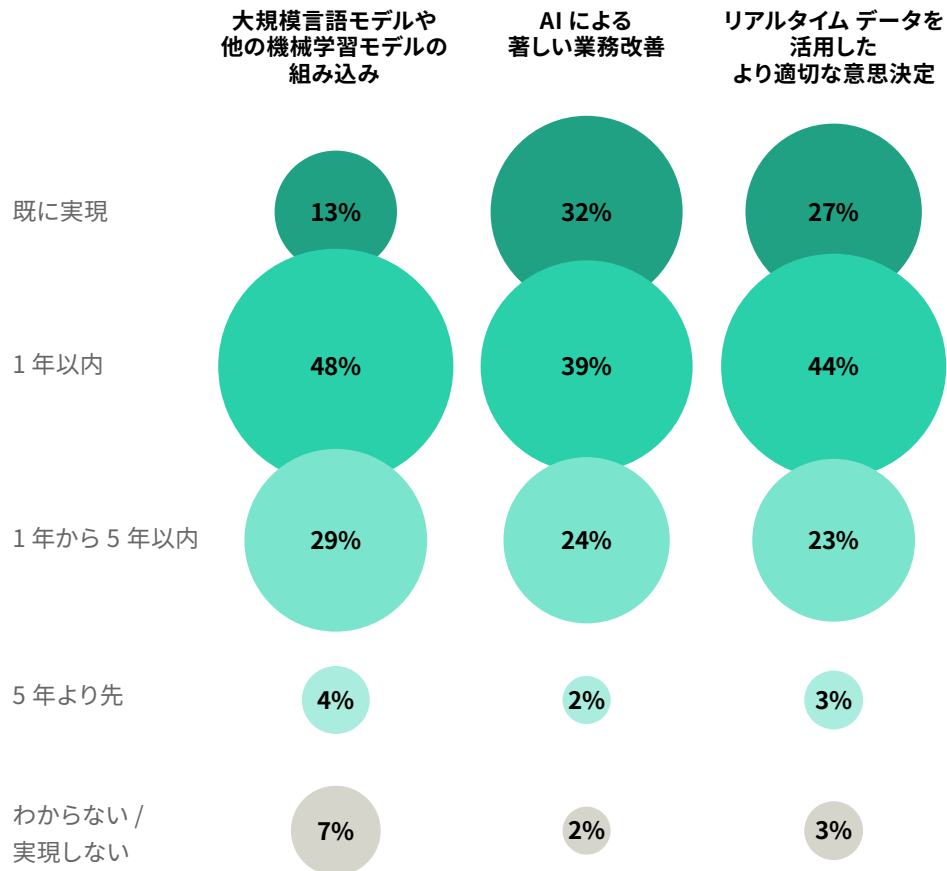
持続可能な材料、デジタル設計、拡張性のある製造プロセスを組み合わせることで、Nexus Power 社は性能、コスト、環境への影響を調和させた、エネルギー貯蔵の新たなモデルを構築しています。その結果、単なる新しいタイプのバッテリーに留まらず、より持続可能な循環型経済で製品をどのように設計・製造すべきかの根本的な見直しを実現しました。

[詳しく読む](#)

Nexus 社は、バッテリーパックの設計と試作に Autodesk Fusion を採用しています
[画像提供 : Nexus Power]



AIの導入が進むことに、リーダー層は大幅で即効性のある効果を期待



調査項目：「以下のことが、いつ実現すると考えていますか？」8段階で評価。可視化のため統合。

AIのアーリーアダプター（AIを積極的に取り入れ、既に業務へ統合している組織）は、導入が遅れている同業他社よりも大きなメリットを享受しています。これは特に驚くべきことではありませんが、これほどの短期間で大きな影響が生じていることは、早期導入がいかに即効性のある成果をもたらすかを示しています。

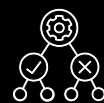
AIのアーリーアダプターにおける真のメリットは「増幅効果」にあり、労力を増やすことなく、反復プロセスや選択肢が指数関数的に増加します。時間が経過し、これらのシステムがワークフローへさらに統合されることで、その増幅効果は相乗的に大きくなっていきます。AIのアーリーアダプターにとって、時間こそが強みになります。時間と予算を早い段階で投資することで、プラス

のリターンをより早く得ることができ、パフォーマンスと競争優位性の両面で他社との差を広げることができるのです。

AIのアーリーアダプターは、既にAI統合による大きな恩恵を得ており、デザインと創造の業界の各組織は、そこに追いつこうと競い合い、比較的短期間で大きな成果が得られることを期待しています。リーダー層の48%が大規模言語モデルの導入を計画しており、44%は今後1年以内にリアルタイムデータを活用することで、より良い意思決定を行うことを期待している。導入までの期間が短くても、その期待は衰えていません。リーダー層の39%は、AIによる有意義な改善が同時に得られると期待しています。

アーリーアダプターのメリット

AIのアーリーアダプターは、AI投資によるプラスの効果の実感において、同業他社を大きく引き離しています。



意思決定：
+18 ポイント



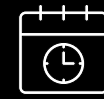
成果の質：
+15 ポイント



イノベーション：
+14 ポイント

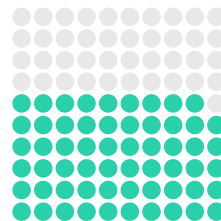


コスト：
+12 ポイント



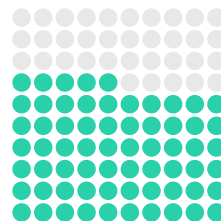
生産性 / 時間短縮：
+7 ポイント

次なる イノベーション： エージェント型 AI



59%

の組織が既に、もしくは1年以内に
エージェント型 AI を導入予定



65%

の AI アーリーアダプターは
エージェント型 AI を既に活用



44%

の組織が
エージェント型 AI に投資中

「弊社は AI エージェントの導入と実証を開始しており、今後数年のうちに、こうしたエージェント機能が弊社のツールやワークフロー全体に急速に広がっていくものと期待しています」

THOMAS HYDE 氏
Beca 社 Chief Transformation and Innovation Officer

オートデスクのリサーチ部門を担当するマイク・ヘイリー上級副社長は、エージェント型 AI や、より広義の AI エージェントという概念は、現在の AI ブームにおいて最も注目を集める分野である一方で、最も誤解されやすい分野でもあると述べています。

現在の AI エージェントとその未来の姿

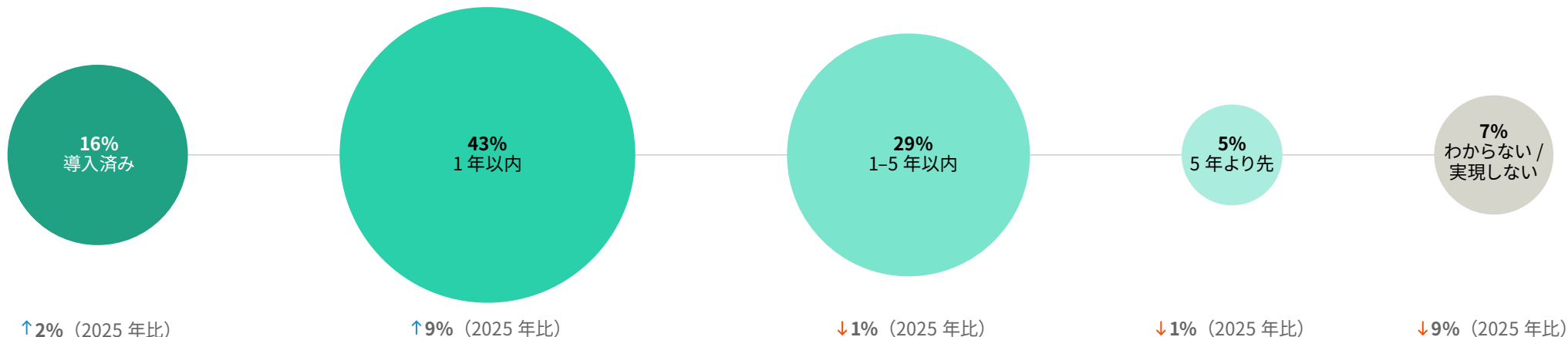
「実際のところ、我々は AI エージェントを主に 3 つの異なる観点から捉える傾向があります」と、ヘイリーは述べています。「1 つ目の解釈は比較的シンプルなもので、ユーザーに代わって一連のタスクを実行できるアシスタントとしてのエージェントです。この枠組みでは、エージェントは本質的に既存ツールの延長線上にある存在であり、受け取ったプロンプトをステップに分解し、それをシステムを横断して実行できるものです。これは、現在多くの組織が AI エージェントの実験を行っている方法に最も近いものです」。

「2 つ目の解釈は、よりワークフロー重視のもので、ここでは、エージェントは単にタスクを実行するだけでなく、プロセスを調整します。エージェントは異なるツールやデータセットを横断し、依存関係を管理し、人間の絶え間ない介入なしに業務を推進することができます。これにより、AI は指示に応答するツールから、業務の遂行プロセスへ能動的に関与する存在へと変化し始めます」

「3 つ目の解釈はより野心的なもので、その大部分は依然として理想論の域を出ていません。この見方では、エージェントとは高度な自律性を持って動作できるシステムであり、意図を理解し、意思決定を行い、変化する状況に適応します。これは将来を展望するシナリオでしばしば議論されるエージェント型 AI の形態ですが、ほとんどの実用的なアプリケーションでは、まだ完全には実現されていません。」



デザインと創造の業界においてエージェント型 AI の導入が急増



調査項目：「以下のことが、いつ実現すると考えていますか？」8段階で評価。

デザインと創造の業界の組織にとって、現在の成熟度レベルであっても、AI エージェントは極めて大きな可能性を持っています。エージェントはシステムを連携させ、反復的なプロセスを自動化し、プロジェクトのあらゆる段階でステークホルダー間のコラボレーションを可能にすることで、ワークフローの摩擦を軽減できます。このほぼ未開拓な潜在能力ゆえに、経営陣は早期導入を熱望しています。43%の組織が1年以内にエージェント型 AI の導入を計画しており、これは前年比 26%の増加となっています。

エンジニアリング コンサルティング会社 Haskoning でデジタル テクノロジー担当ディレクターを務める Andrew Stanford 氏は「こ

れまでに 4,000 人以上に AI エージェントの研修を実施し、現在 200 以上のエージェントが実際に稼働しています」と述べています。「入札書の審査から法的契約書の分析まで、あらゆる業務を支えており、これは AI がいかに日常業務に浸透しつつあるかを示すものです」。

この変化がもたらす潜在的な影響力は甚大です。AI システムがタスクの調整や依存関係の管理を行い、システム間で業務を円滑に進めることができれば、複雑なプロセスにおける摩擦を軽減し、組織の業務効率を大幅に向上させることができます。

「AI の活用は、弊社において不可欠なものとなっています。特に、日常的な書類作成や情報収集の効率化において、その効果は顕著であり、チームはより価値の高いクリエイティブやデザイン業務に時間を割くことができるようになりました」

大倉 佑介氏
株式会社船場 BIM マネージャー

Gearbox Software 社が自動化されたパイプラインで映像制作の規模を拡大

Gearbox Software 社は、チーム間の複雑な制作ワークフローを調整する、高度に自動化されたシステムを導入によりアニメーションのパイプラインを一新しました。このスタジオは、これまで手作業で行っていたシーン、アセット、データの管理に代えて、ファイル作成、データ管理、シーンの組み立てなどの反復的なタスクを自動化するパイプラインを構築。制作プロセス全体における摩擦を軽減しました。

従来、ゲームにおけるシネマティック コンテンツの制作は手作業が多く、リソースを大量に消費するため、制作できる物語コンテンツの量に制限がありました。同社は、この制約にアニメーションとパイプライン プロセスの大部分を自動化することで対処し、シーケンス、データフロー、制作の調整を、個人でなくシステムが管理できるようにしました。

個々のタスクだけでなくワークフローの調整そのものを自動化することで、Gearbox は効果的に「エージェント型」の制作モデルへと移行。現在はシステムが調整、アセット追跡、シーケンス処理を担当するため、チームはストーリーテリングやクリエイティブ ディレクションに集中できるようになりました。

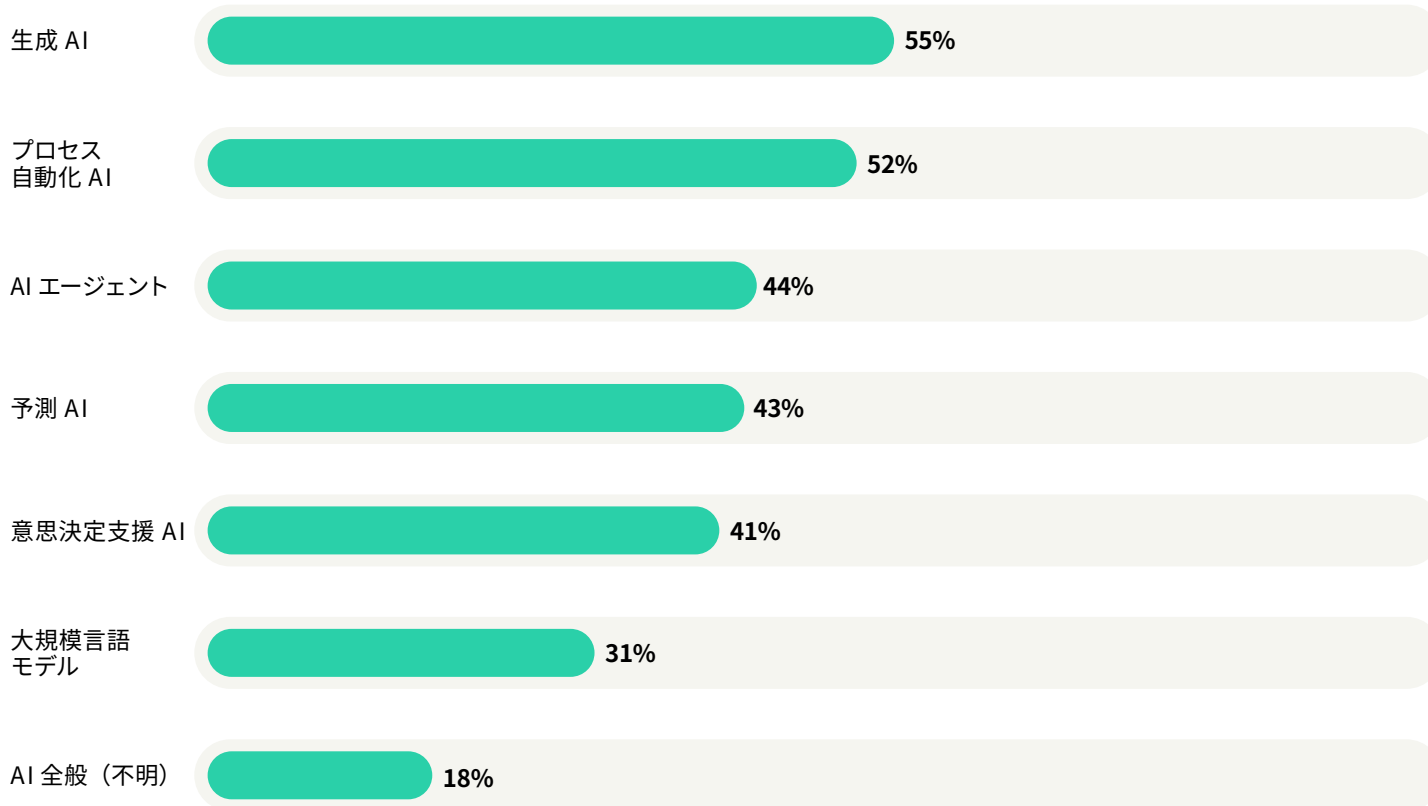
その一方で、作業に費やす時間はより充実したものとなっています。シネマティック ワークフローを導入する以前、同社のデジタル アーティストはプロジェクト時間の約 60% をファイル管理などのロジスティクス業務に費やし、アニメーションなどのクリエイティブ作業に避けるのはわずか 30% で、残りの 10% はメール対応などの事務作業に充てられていました。現在、同社のデジタルアーティストの時間は、60% がクリエイティブ作業、30% がロジスティクス、10% が事務作業に費やされています。

詳しく読む

映像美が魅力のアドベンチャー ゲーム『New Tales from the Borderlands』では、キャラクターの行動をプレイヤーが決定します
[画像提供 : Gearbox Software/2K Games]



AIへの投資は生成AI、自動化、エージェント型AIに重点



AIのアーリーアダプターのほぼすべて（98%）で、リーダー層がAIの導入を後押ししていると回答しているのに対し、それ以外の組織では73%に留まっています。まだ自律型AIシステムの真価は十分に発揮されていないものの、アーリーアダプターでは長期的に他を圧倒するほどの恩恵が得られると見込まれており、既に大きなパフォーマンス差がさらに拡大する可能性があります。

各組織は、このパフォーマンスの格差を投資の拡大で縮めることを期待しています。全リーダー層の44%がAIエージェントへの投資を優先しており、これは来年中にAIエージェントを導入するというリーダー層の決意とも一致しています。

ただし、この潜在的な可能性は、データ品質、ワークフローの構造、システムの統合度など、AI全般に影響を与える要因によって制約されます。基礎をしっかりと確立した組織こそが、エージェント型AIの早期導入による恩恵を享受できる理想的な立場にあると言えるでしょう。

57%

のAIのアーリーアダプターが
エージェント型AIに投資している一方で
その他の組織では41%に留まっています

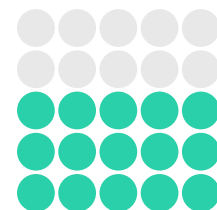
調査における質問項目：「今後12か月間、貴社におけるAI投資の優先分野には以下のいずれが該当しますか??」該当するものすべてを選択してください。割合を選択。注：読みやすさを考慮し、回答選択肢の一部を省略しています。「わからない」は非表示。

AI を軸とした未来： その独自の課題と ソリューション



50%

のリーダー層が
AI の導入が
最大の課題だと回答



60%

のリーダー層が
AI に関して
セキュリティを懸念

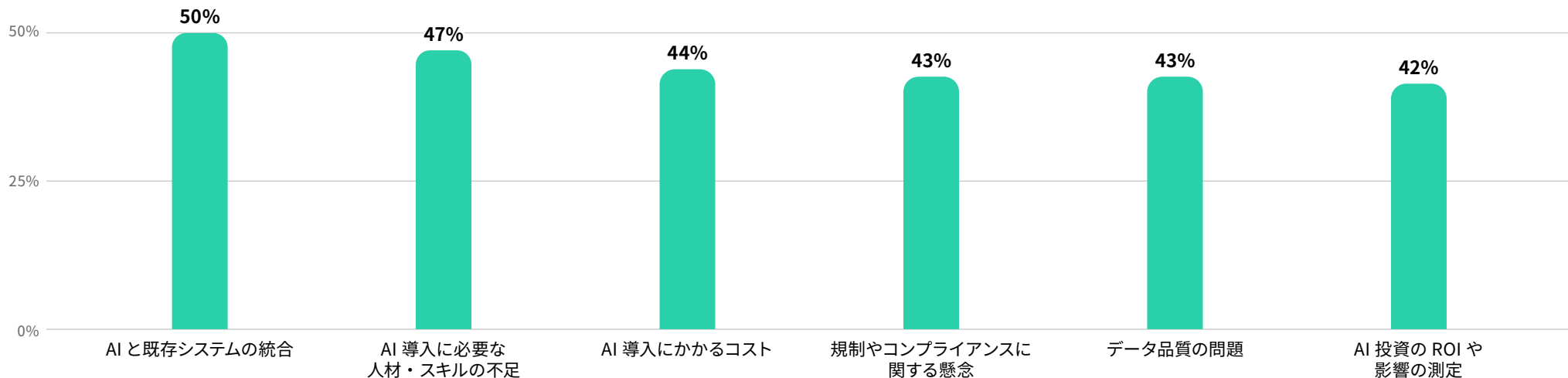


73%

のリーダー層が、
共通データ環境 (CDE) によって
コラボレーター間の信頼が
高まると回答

AIの導入が、組織のあらゆるレベルで課題をもたらす

最も一般的な課題は既存システムとの統合と人材確保



調査における質問項目：「以下の各項目は、御社におけるAI導入において、どの程度の課題となっていますか？」上位の2項目：「かなりの課題」と「大きな課題」。注：「該当なし」は非表示。

AIの導入が急務であるにもかかわらず、デザインと創造の業界において、その実装は依然として困難を極めています。

リーダー層の50%にとって、実装上の最大の課題が、AIとレガシーソフトウェアの統合です。これらのシステムの統合には、機械学習、データエンジニアリング、大規模インフラ、UXデザインなど、従来のソフトウェア開発をはるかに超えた分野における専門知識が必要です。また、AIの導入が進むにつれて急速に変化している、法的・規制上の考慮事項への対応も求められます。

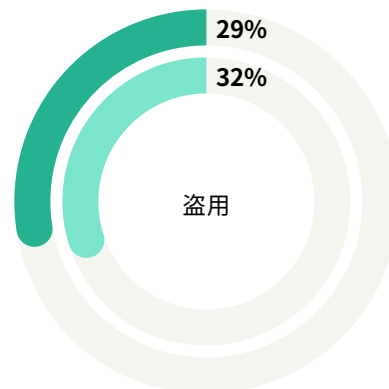
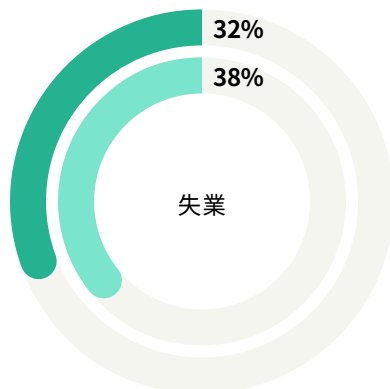
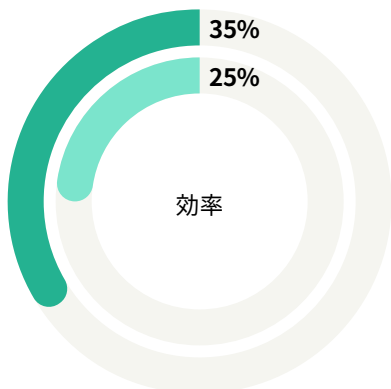
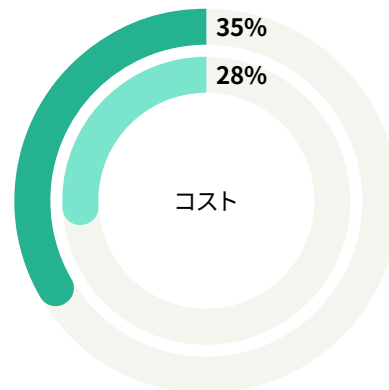
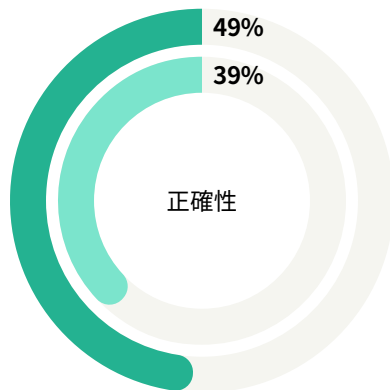
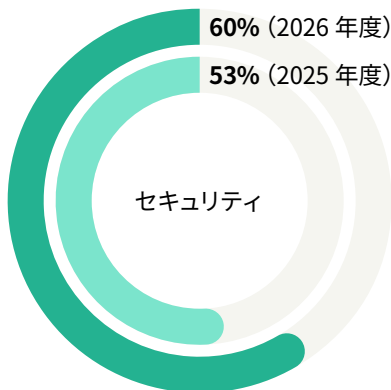
AIの導入には、継続的な投資と評価、反復的な改善が必要です。その能力を、時間をかけて構築する必要がありますが、特にROIが明確かつ測定可能であることが求められる環境においては、投資の正当性の説明が困難なる場合があります。成功を収めるには、リーダーは即座に価値をもたらす短期的なユースケースに注力すると同時に、AI統合による長期的なROIへの影響を実証する長期的な取り組みの計画にも注力すべきです。

「本格的なAIシステムを構築するには、もっと多くの実世界のデータが必要です。十分なデータがなければ、私たちが下すべき判断において、モデルは十分な信頼性を確保できません」

SWAPNIL SHRIVASTAV 氏
Uravu Labs 社 (空気から水を生成するシステムのプロバイダー) CEO

リーダー層の最優先事項は AI のセキュリティと正確性

AI による雇用喪失の懸念は緩和



AI がワークフローに深く組み込まれるようになり、議論の中心はデータの活用、保護、管理に関する課題となっています。AI が普及した未来において、セキュリティとデータの正確性、管理は、オプションでなく必須の要件となります。

デザインと創造の業界のリーダー層は、セキュリティが最大の関心事であるという点で一致しています。その 60% がセキュリティを最重要課題としており、これは 2025 年比で 7 ポイントの増加であり、AI に関する懸念事項の中でも群を抜いて最大の割合を占めています。

セキュリティと密接に関連して、正確性への懸念も前年から大幅に高まりました。AI の急速な普及に伴い、十分に検証されていないモデルが生成した出力に対して、懐疑的な見方が強まっているためです。

John Sisk & Son 社でデジタル プロジェクト デリバリーを担当する Cillian Kelly 氏は「組織がデータとプロセスに関する基礎を確立していなければ、たとえ最先端の AI ツールでも期待通りの成果は得られないでしょう」と述べています。

AI は、単に高性能であるだけでは不十分です。予測可能で透明性が高く、組織の期待に沿ったものでなければなりません。

調査における質問項目：「御社の属する業界において、AI に関して最も懸念している点は？」該当するものをすべて選択してください；パーセントを選択。注：「懸念事項はない」という項目は非表

特に注目すべきは、業界においてAIに関するセキュリティや正確性への懸念が高まっているにもかかわらず、リーダー層が自社のデータのセキュリティと正確性に対して極めて強い自信を持っている点です。5社中4社が、自社のデータは安全であり、データ構造も整っていると回答しています。

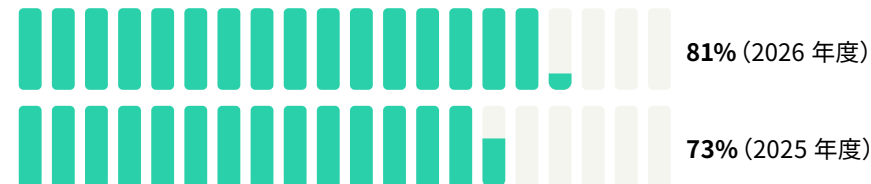
その結果、データセキュリティへの高い信頼感と、AIに関連するセキュリティリスクへの懸念の高まりという、矛盾した状況が生まれています。リーダー層は、従来の意味でのデータセキュリ

ティについては安心しているかもしれませんが、AIがデータとの新たな関わり方を生み出し、それが不確実性を生み出す可能性があります。

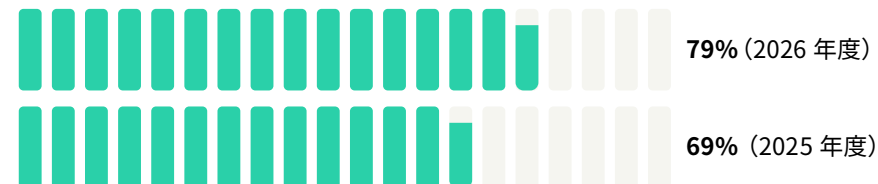
データ共有に対するリーダー層の信頼を高める一因が共通データ環境（CDE）であり、これはプロジェクトに関わるすべてのステークホルダーに、「信頼できる唯一の情報源」として機能します。リーダー層の大多数（73%）が、CDEがコラボレーター間の信頼を高めると述べています。

デザインと創造の業界における現在の基盤はデータ

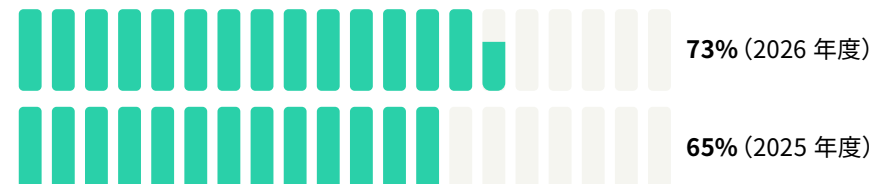
自社のデータは安全



自社のデータは適切に整理されている



CDEがコラボレーター間の信頼を向上



調査における質問項目：「以下の記述にどの程度同意しますか？」 [記述] 5段階評価。上位の2項目：「やや同意する」と「強く同意する」。

AIのアーリーアダプターが享受するメリット
AIのアーリーアダプターは、データ基盤において明白なメリットを享受しています。



+15ポイント
自社のデータは安全だと回答



+16ポイント
自社のデータが適切に整理されていると回答

Kalyon Construction がデジタル化によって Ziraat Towers の複雑な課題を克服

Kalyon Construction は、イスタンブールにおける Ziraat Towers の建設において、一連の複雑な技術的課題に直面しました。このプロジェクトでは、数千もの独自の構成要素から成る、極めて複雑なファサード [JG17.1] [BH17.2] の管理が必要で、設計、エンジニアリング、施工の各チームを分断されたワークフローの中で調整しなければなりません。従来のツールや連携の取れていないシステムでは、精度を維持し、整合性を確保し、設計意図を施工可能な成果へと効率的に落とし込むことは困難でした。

この課題に対処するため、同社は完全なデジタル化とモデルベースのアプローチを採用。詳細な 3D モデリング、パラメトリック設計、クラウドベースのコラボレーションを統合することで、チームはすべての関係者がリアルタイムで正確なプロジェクト データにアクセスできる共有環境を構築しました。自動化されたワークフローを用いて数千もの独自のファサード要素と施工図を作成し、手作業の負担を軽減するとともに一貫性を向上。デジタル シミュレーション & 計画ツールにより、タスクをより効果的に調整し、プロセスの早い段階での問題の特定が可能になりました。

このアプローチは明確な成果をもたらし、従来の方法と比較して 3D モデルと施工図の作成時間を 25% 短縮。チームは高い技術的精度と品質を達成しただけでなく、プロジェクトのカーボンフットプリントを低減して LEED プラチナ認証の取得も実現しました。

この影響は単一のプロジェクトに留まらず、今後の業務への取り組み方にも及びます。同社はデジタル ワークフローと自動化を業務に組み込み、複雑な建設プロジェクトを管理するための、より再現性が高く拡張性のあるモデルを構築。これによって効率の向上とリスクの低減を実現し、大規模プロジェクトにおいても、より良い成果を上げることが可能になりました。

[詳しく読む](#)

新しいイスタンブール・ファイナンシャル・センターの目玉となる Ziraat Towers は、デジタル デザインやコラボレーション ツールを活用することで、業務プロセスを改善し、持続可能性の目標を達成する方法を体現しています。

[画像提供 : Kalyon Construction]



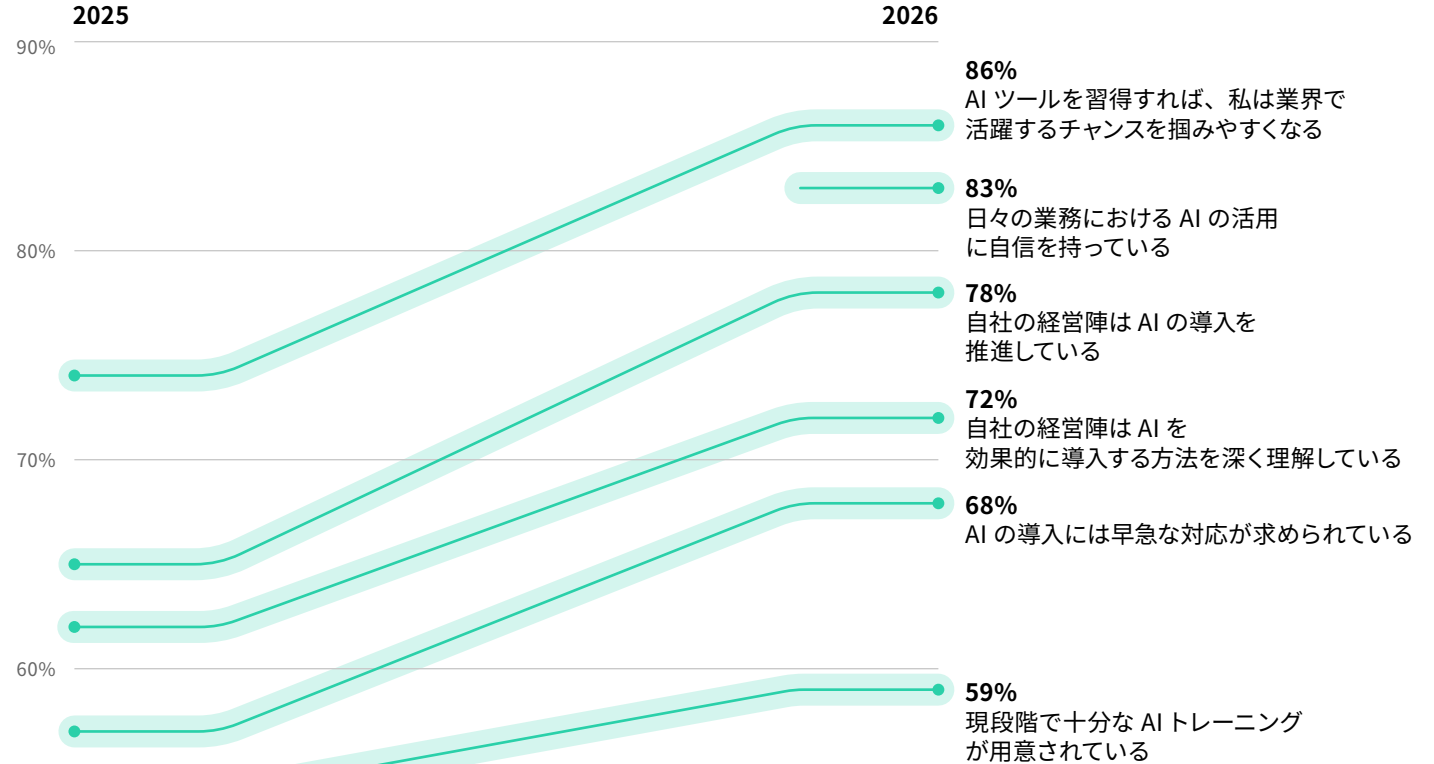
AI の導入は単なる技術的な課題に留まらず、組織全体において技術・概念両方の新たなスキルを必要とします。

AI の導入は緊急の課題だと回答するリーダー層は2/3に上り、自社が導入を奨励していると述べた割合は13ポイント上昇して78%となりました。しかし、AIに関する研修が十分だと回答した割合は59%に留まっています。過半数には達しているものの、自社が目指すべき水準と、そこに到達するための現在の研修のレベルとの間には、依然としてかなりの隔たりがあります。

世界的な環境保護NPOであるザ・ネイチャー・コンサーバンシーのN4W施設で技術ディレクターを務めるCarlos Rogéliz氏は、この課題は単に新たなツールの導入に留まらないと述べています。「課題はツールそのものだけでなく、人々が適切な概念的枠組みの中でそれらを使いこなし、その成果が実際に業務を支えられるかどうかという点にあります」。

こうしたAIに関するトレーニングや準備の不足は、既に組織へ影響を及ぼしています。リーダー層の47%が、人材やスキルの不足がAI導入における主要な、あるいは重大な課題であると回答しており、労働力不足への懸念も5ポイント上昇して36%に達しています。技術がスキル開発のペースを上回っての発展し続ける中、スキルアップやリスキリングが競争上の優位性となり得ます。

AI の導入が急務にもかかわらず、人材育成は依然として不十分



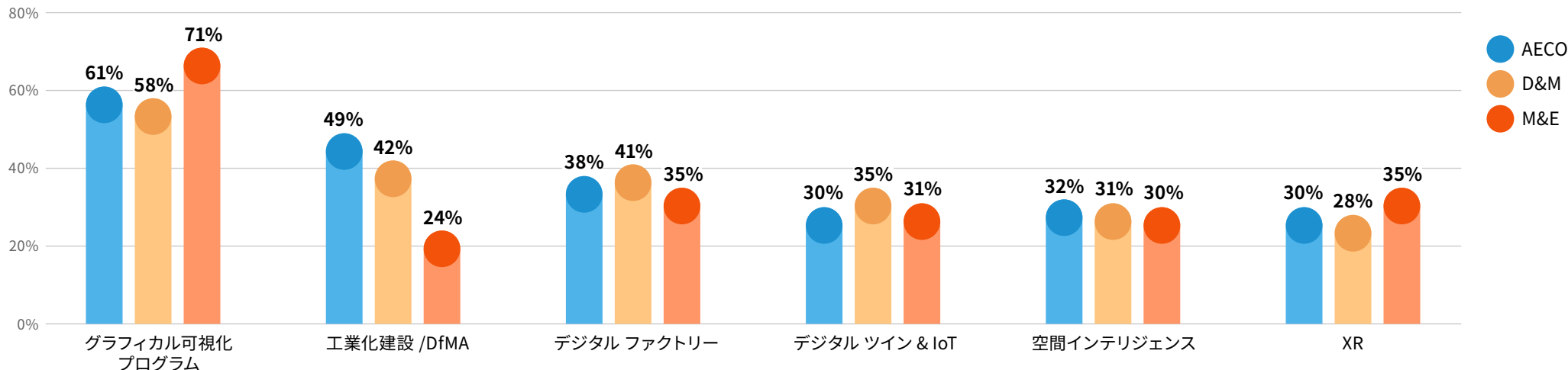
調査における質問項目：「以下の記述にどの程度同意しますか？」[記述]5段階評価。上位2項目：「やや同意する」と「強く同意する」。

結論



業界横断のコンバージェンスの焦点は可視化ツール

デザインと創造の業界は、業界外のツールを導入



調査における質問項目：「前の質問で、御社は他業界のデジタル技術やツールを導入していると回答されました。その業界横断的な技術やツールは、具体的にはどのようなものですか？」該当するものすべてを選択してください；パーセントを選択。

こうした課題はあるものの、進むべき道は明確です。成功を収める組織とは、AIの課題を一時的な障害ではなく、根本的に新しい働き方を導入するプロセスの一部であると認識している組織です。プロジェクトのライフサイクル全体を通じてAIを実用化するには、それを支える人材、プロセス、テクノロジーへの投資が必要です。

組織が直面している問題の多くは、特定の業界に固有のものではなく、デザインと創造の業界の、あらゆる産業に共通しています。そのため、リーダーたちは業界外に解決策を求め、自社の進歩を加速させる方法を学ぼうとする傾向が強まっています。

組織の2/3が他業界の手法やツールを導入し、75%が業界外にイノベーションのヒントを求めており、いずれも前年比で5ポイント上昇しています。これらの数値はAIのアーリーアダプターではさらに高く、80%が新しいツールを導入し、87%が業界外にイノベーションを求めているのに対し、その他の組織ではそれぞれ65%と73%に留まっています。

Populous はプロジェクトの規模を 工業化建設と AI を活用したワークフローで拡大

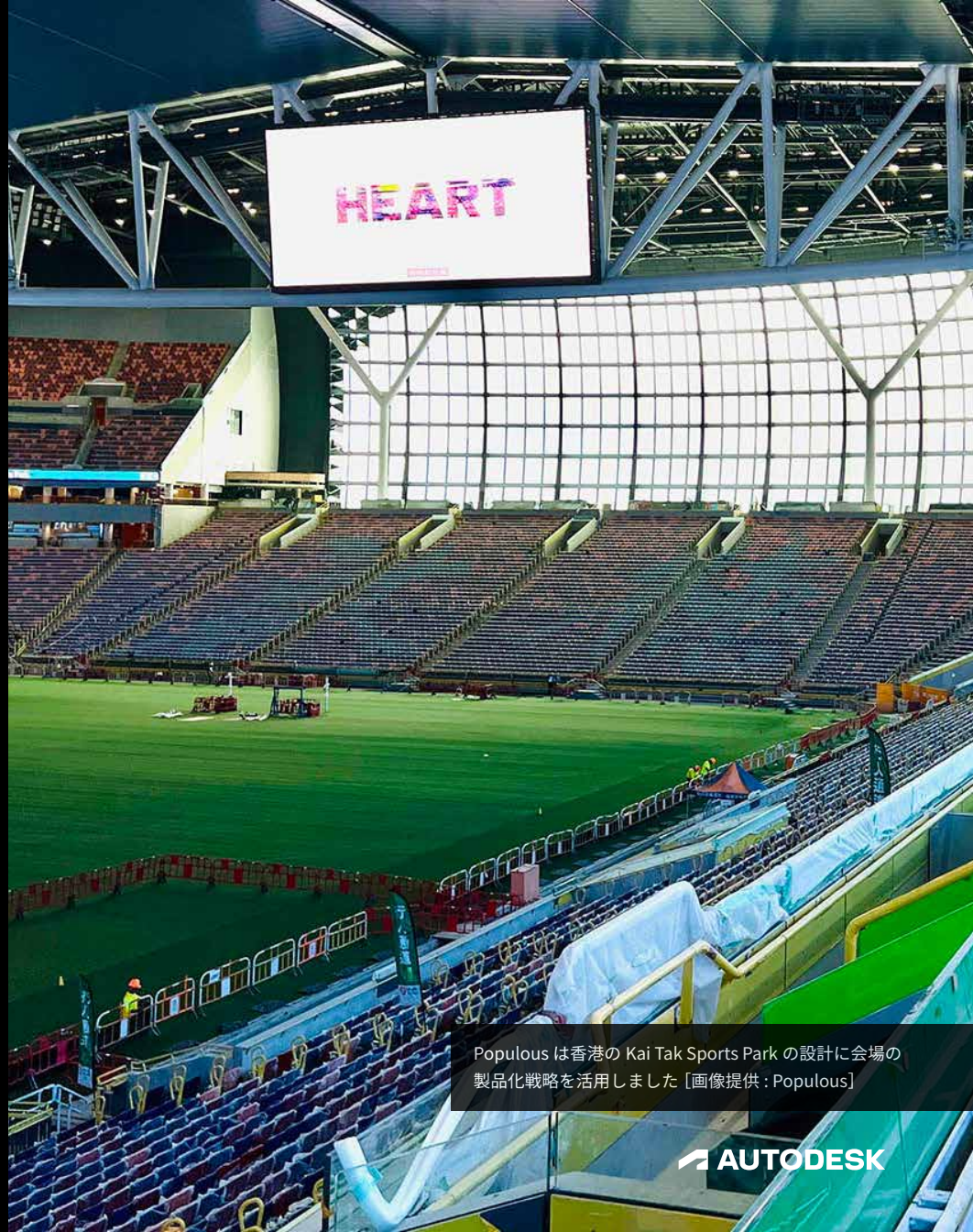
Populous は、製造業の製品化の原則を建築分野に応用することで、大規模施設の設計と施工のあり方を刷新しています。スタジアムやアリーナは、従来は単発プロジェクトとして扱われ、チームは毎回ゼロから設計を始める必要がありました。同社はこのモデルを、プロジェクト間で応用できる再利用可能な設計コンポーネント、標準化されたシステム、デジタルワークフローを開発することで変革しています。

このアプローチにより、チームはより迅速かつ効率的に作業を進めることが可能になります。実績のある設計要素を再利用し、分野を横断してデジタルツールを統合することで作業の重複を削減し、建築家、エンジニア、施工業者間の連携を強化。これにより、測定可能な効率化が実現しています。ある事例では、ジェネレーティブデザインと自動化されたワークフローを活用することで、設計効率を約 95% 向上させることができました。

その影響は設計の枠を超えています。製品化は、より予測可能な成果物の提供を可能にし、大規模で多岐にわたるステークホルダーが関与するプロジェクトにおける、複雑さの管理を支援します。また、資材の無駄を削減し、時間の経過とともに適応できる柔軟で多目的利用可能な施設の創出を支援することで、より持続可能な成果をもたらします。

Populous は、工業化された建設手法とデジタル技術を組み合わせることで、デザインと創造のための、より拡張性の高いモデルを構築しています。その結果、プロジェクトの納期短縮や効率化が実現するだけでなく、組織の価値に対する考え方も変化。特注で一回限りの建設から、プロジェクトポートフォリオ全体で長期的なパフォーマンスを向上させることができる、再現性のあるシステムへと移行しています。

詳しく読む (英語)



Populous は香港の Kai Tak Sports Park の設計に会場の製品化戦略を活用しました [画像提供: Populous]



この業界横断的なコンバージェンスが、DXやAIの導入に関する組織の考え方を刷新しつつあります。こうした思考を積極的に取り入れている企業は、確信を持って前進し、新たな市場の開拓や新規技術の導入、働き方の再考において、より有利な立場にあります。

同様に、AIのアーリーアダプターは他の組織より新市場の開拓を検討している割合が高く（81%対71%）、将来に対する不確実性も低い（53%対60%）傾向にあり、こうした企業がリスクよりも機会を見出す態勢が整っていることを示唆しています。

テクノロジーの進化が続く中、デザインと創造の業界のリーダー層は、AIが支える未来の次なる展開に注目しています。

Uravu LabsのSwapnil Shrivastav CEOは「今こそ、新たなイノベーションやソリューションが本格的に飛躍する大きなチャンスがあると思います」と語ります。「基盤は整ったので、この分野で今後さらに多くのアイデアや技術が開発されていくでしょう」。

オートデスクでリサーチを担当するマイク・ヘイリー上級副社長も、それに同意します。「これが始まりだとすれば、今後展開されるものは、この私たちが理解し始めたばかりのものを発展させたものになります。こうした機能が実際のワークフローや業界の課題に適用されることで、その可能性はさらに広がっていくはずです」。

『デザインと創造の業界動向調査 2026：AI 動向』 について

『デザインと創造の業界動向調査 2026: AI 動向』レポートのデータは、2026年1月から2月にかけて、Statista Plus Researchと共同で実施した「AI 動向 (AI Pulse)」調査をもとにまとめたものです。本調査には、オーストラリア、ブラジル、カナダ、中国、フランス、ドイツ、インド、イタリア、日本、メキシコ、中東（サウジアラビアおよびアラブ首長国連邦）、北欧諸国（デンマーク、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン）、スペイン、韓国、英国、米国といった様々な地域の、世界中の業界リーダーおよび専門家 2,500 名からの回答が含まれています。本調査は、建築・エンジニアリング・建設・運用 (AECCO)、製品設計・製造 (D&M)、メディア&エンターテインメント (M&E) を含む幅広い分野の業界専門家から得られた知見を基にしています。

『デザインと創造の業界動向調査 2026: AI 動向』の追加データは、オートデスクの『デザインと創造の業界動向調査 2025: DX 動向』の一部から抽出・集計されたものです。

また、本レポートにはデザインと創造の業界リーダーや専門家への定性インタビューも掲載されています。

オートデスクについて

オートデスクは、世界がデザイン・創造される方法を変革しています。弊社の技術は建築、エンジニアリング、建設、運用、製品設計、製造、メディア&エンターテインメントなど幅広い分野で、世界中のイノベーターが大小さまざまな課題を解決できるよう支援を行っています。環境に優しい建物からスマートな製品、観客を魅了する大作映画に至るまで、オートデスクのソフトウェアは、すべての人々のため、より良い世界を設計・創造するお手伝いをします。

詳細については、autodesk.com/jp をご覧いただくか、ソーシャルメディアで @autodesk をフォローしてください。

本調査レポートに関するオートデスクへのお問い合わせ、または今後の調査プログラムへの参加登録は、state.of.design.and.make@autodesk.com まで。

本レポートに記載されている情報は一般的な情報提供を目的としたものであり、お客様の参考としてのみ提供されています。オートデスク社は、本レポートに含まれる情報、テキスト、画像、リンク、その他の項目の正確性または完全性について、いかなる保証もいたしません。

オートデスク社は、本レポートに記載されているアドバイスに従った場合に、特定の成果や結果が得られることを保証するものではありません。

© 2026 Autodesk, Inc. All rights reserved.